

内藤記念くすり博物館（岐阜県各務原市）

—日本初、薬の総合博物館—

社団法人中部開発センター

企画事業部 折戸 厚子

新しい観光のあり方“産業観光”が、中部圏において積極的に進められています。“産業観光”は、産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでに、どのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する知的好奇心にあふれた観光です。

具体的には、製造業の工場見学や、伝統産業の体験プログラム、企業博物館などがあげられます。こうした施設を訪ねる機会は、従来から社会見学や企業視察などがありましたが、特定の団体や目的に限らず、個人客や家族客などの一般観光客でも楽しめるよう門戸を広く開放していこうとするところに“産業観光”の特徴があります。

今回は、岐阜県各務原市の「内藤記念くすり博物館」を紹介します。



合掌造りをイメージした外観の内藤記念くすり博物館

日本初のくすりの総合的博物館

内藤記念くすり博物館は、1971年、エーザイ株式会社の創業者である内藤豊次氏によって、岐阜県川島町（現在、各務原市）に開館しました。

当時、日本には薬学に関する博物館はなく、このまま放置すれば、歴史ある日本の薬学を伝える貴重な史資料が失われると懸念した豊次氏は、日本全国の旧家や医家、薬屋をめぐって、歴史資料類や実際に使われてきた製薬道具など価値ある資

料を収集しました。趣旨に賛同した人々の協力によって、その後も資料は増え続け、開館38年の現在は65,000点の収蔵資料を擁する博物館、江戸時代の和装本を含む62,000点を収蔵した図書館に、約600種の薬草・薬木を育てる薬用植物園を加えた、薬に関する総合的な博物館として、豊富なコレクションを誇っています。

豪快な展示品の並ぶエントランス

広いロビーの壁には、たくさんの大看板が並んでいます。金箔を用いるなど豪華なものも多い、こうした看板は、実際にかつて薬屋で使われていたものです。江戸時代以降、流通経済圏の拡大に伴って、薬業も大いに発展し、人々の関心と呼ぶよう、薬屋は看板などの広告宣伝に力を入れるようになってきました。

また、4mもある大きな水車を思わせる木製の機械が目をはきまします。これは「人車製薬機」と呼ばれる、江戸時代の薬屋で使われていた機械で、大きな輪の中に人が入って足踏みをして輪を廻し、石臼をひき、薬草を粉にする仕組みとなっています。複製ではありますが、実際に動かすこともできるようになっています。

このロビーには、ベンチがあり、ゆっくり薬草茶を味わうこともできます。

病魔除けの神獣から始まる展示

入り口のすぐに「白沢」と呼ばれるどことなくユーモラスな置物が鎮座しています。白沢は中国に伝わる病魔除けの神獣で、牛のような体に人の顔、6本の角と9つの目を持っています。病気や災難を防ぐとされ、江戸時代には旅に出る時に、白沢の絵がお守りとして重宝されたといえます。

「健康への祈り」と題されたコーナーでは、こ

うした白沢のお札や掛け軸、薬や健康にまつわる神・仏像など、健康を神仏に頼るしかなかった時代の様々な祈りの道具が展示されています。

続いて、「くすり」の始まりである生薬の展示コーナー。生薬は、植物や動物を乾燥させるなどして加工した薬で、材料となるアルマジロ、ヘビ、クマ、サイの角やセミの抜け殻など、これも薬になるのかとびっくりするようなものがズラリ並んでいます。

医薬の歴史、人類の歴史にそった常設展

常設展は、江戸時代・明治時代の資料を中心に、医薬の歴史の流れに沿った時系列で展示されています。中程には、明治中期の薬屋の様子が復元展示されています。柱や壁が黒光りする木造の店舗に、大きく豪華な看板がかけられ、内部には乾燥のためにたくさんの薬袋がつるされているなど、当時の様子を目に見えるように伝えてくれます。

さらに「蘭方医学の伝来」「富山のくすり（配置売薬の歴史）」「薬を作る」と続きます。「解体新書」の現物や、シーボルトの薬箱など、だれもが学校で習う歴史上の貴重な品々、薬売りが子供に配った紙風船やケロちゃん、サトちゃんといった薬キャラクターなどの懐かしい品々、ツボを解説する経絡人形や江戸時代の解剖図などグロテスクにも感じられる品々など、多種多様な薬道具が、使われていた時代や人を彷彿させる解説とともに



「人車製薬機」を実際に動かしてみる体験イベントが行われることも



牛の体に人の顔を持つ「白沢」



明治時代の薬屋を再現



測定機器の並び体験コーナー



なつかしい薬キャラクターが並び



体中のツボを解説する経絡人形

並べられ、様々な切り口で薬の世界に親しむことができます。

企画展示と測定コーナー

2階では、毎年、テーマを替えて企画展が開催

されています。こうした企画展は、くすり博物館の学芸員の研究成果の公開の場であるとともに、65,000点もの収蔵資料のうち常設展では展示しきれない資料が、テーマにそって公開される機会です。普段は見るできない収蔵資料も見ることができます。現在の企画展は「くすりの夜明け」というテーマで、今日の医薬の基礎となった近代に創製されたさまざまな医療技術や薬品、衛生ポスター等が紹介されています。(2009年3月29日まで)

また、2階では来館者が、自分の健康に関するデータを調べられる体験コーナーがあり、「脳内年齢」「体脂肪」「骨密度」「反射神経」等、気になる項目を自由に測定できるようになっています。

図書館と薬草園

図書館は薬学・医学分野における歴史的な調査研究に役立つ専門図書館となっており、手続きをすれば誰でも閲覧・貸出・複写などのサービスを受けられます。

温室もある薬草園では、薬草として名前は知られているが実物は普段はあまり見られない植物、実は薬草にもなるよく見かける植物等々、一つ一つに解説がつけられ、四季にあわせて様々な草花を見ることができます。温室にはバナナやカカオ、ミッキーマウスの木などがあり子供達に人気です。



四季折々の草花が迎える薬草園



温室にはバナナやカカオなどが実る

施設の概要

住 所 〒501-6195
岐阜県各務原市川島原竹早町1

T E L 0586-89-2101

F A X 0586-89-2197

U R L <http://www.eisai.co.jp/museum/>

開館時間 9時～16時30分

休館日 月曜日、年末年始

入館料 無料

見学方法

博物館の入場料は、創業者・内藤豊次氏の「広く一般に開放したい」という意向により、開館以来、無料となっています。

また、事前に申し込みをすれば、隣接するエーザイの工場の見学ができるようになっています。緑豊かな公園のような工場として「川島工園」と呼ばれる敷地内には広大な日本庭園もあり、見学コースに含まれています。

食事をする場所はありませんが、3日前までに申し込みれば、エーザイ(株)川島工園内の「厚生センター」で、薬膳料理を味わうことができます。

インタビュー



内藤記念くすり博物館
館長 永縄 厚雄 氏

一くすり博物館の設立の経緯についてお聞かせください。

約40年前の当時の記録を読むと、日本の製薬産業は欧米並になってきたけれど、古い薬学の歴史をまとめて伝える、アメリカのスミソニアン博物館や、イギリスの大英博物館にあたるような施設がどこにもない、このまま放っておくと貴重な資料が散逸してしまうと危惧したことにより、エーザイの創業者が博物館を建設したということです。

総合的な薬の博物館としては全国で初めての施設でした。今でこそ、企業が設立した営利を目的とした博物館はあちこちで開館するようになっていますが、40年前の当時としては斬新な発想だったのではないかと思います。

また、よくあるようなもともと持っていたコレクションを展示するために博物館にしたのではなく、創業者が全国を歩き回り、資料を持っている方から寄贈、あるいは寄託（預ける）していただいで収集しています。当時は入手できても、今となっては手に入らないだろう収蔵品が数多くありますので、時宜にかなった開館だったと考えています。国内だけでなく、海外からのお客様もいらしていますが、ここでしか見ることができないコレクションがあるためでしょう。

一なぜこの地に博物館を作られたのでしょうか。

本社は東京なのに、なぜ、交通の便が良いとはいえないこの地に博物館をおいたかという理由は、博物館の施設を他の目的に利用する考えもあったようです。

工場の立地については、日本の中心であり、関東、関西、全国に出荷するのに便利な土地であったためです。また、欧米の大手製薬会社では公園のような素晴らしい自然に囲まれた場所に工場があることが多かったため、豊かな自然が残るこの地にインダストリアル・パークをつくりたいという思いがあったと言います。木を1本切ったら3本植えるなどのやり方で、周辺の宅地化が進んで自然の松林がなくなっていく中、ここでは今でも松林を多く残し、池を配した日本庭園など、敷地の50%を緑地が占めており、「公園のような工場」であることから「川島工園」と呼ばれています。時々、キジなども見られます。

博物館に話を戻しますと、内藤記念という名前のように、内藤という創業者が思いを込めた博物館です。資料を集めるだけではなく、この地にもっとさらなる夢を創業者は持っていたのではないかなと個人的には考えています。

一主な入場者についてお聞かせください。

平日はバスで来られる団体が多く、お休みの日は家族連れなど個人が多くいらっしゃいます。年間で4万6,000人ほど、1日におよそ150人くらいです。薬草園がありますから、花のある季節のほうがお客様も多いです。

企業の研修、PTAや老人会、医薬関係の大学や薬剤師会など多岐にわたっています。各務原市には、当館の他に、「かかみがはら航空宇宙科学博物館」、「岐阜県世界淡水魚園水族館・アクアト」があり、この3館が連携して、お互いにパンフレットやイベント情報の交換などを行っています。他の2館が有料なのに対して、当館は無料ですから、他の館を見た後、当館を見るなど組み合わせ、楽しまれている場合もあるようです。

一力を入れている点、苦勞をされている点があればお聞かせください。

地域開放ということに力を入れており、まずは地元の方に親しんでいただくこと、楽しんでいただくことを大切にしています。

イベントを定期的におこなっていて、花摘みの体験、ルバーブジャム作り、夏休みの親子で作るポマンダー（香り玉）・さおばかりのイベント、博物館にちなんで実際に昔の石臼などを使ってみるイベントなどに人気があります。薬草観察会で、草花に関心のある人に栽培方法を伝えるなど、見ている楽しいだけではなく、ためになったとか、環境に良いとか、何か得られるものがあることで地域の方に親しんでいただくということがキーワードになると考えています。

ところで、一生の間に一度も薬を飲まない人はおそらくいないでしょう。しかし、人によっては、薬に対する適切な認識を持っていないため、薬をまとめて飲んだり、お茶やビールと一緒に薬を飲んだり、薬の効果を発揮できない服用の仕方をされる場合があります。

薬に関する正しい知識を持ってもらうということは、一企業ではなく、薬業界全体としての課題です。そのため、子供の頃から薬に対して正しい知識を学ぶことが必要ですが、今までの学校では、「くすり教育」はほとんど行われていませんでした。しかし、実は新学習指導要領で学ぶ事項として「医薬品は正しく使用すること」という一文が加えられ、2012年から施行されることになりました。これから「くすり教育」に関する気運が高まってくると思いますが、それに先んじて、学校の関係者、保護者の方達に、なぜ子供のために薬教育が必要なのかを伝えていきたいと考えています。そのための打ち上げ花火として、講演会を今年11月に開催します。こうした講演会から、一人でも多くの先生方に授業で薬について取り上げてみようと思っていただければと思います。せっかくこういう施設がありますので、まず、地元からはじめ、1年で終わらせることなく続けていきたいです。

一人気のある展示、お勧めの展示などご紹介ください。

国内海外にかかわらず興味を持って見ていただけるのは薬屋の復元展示です。ジオラマ展示といって昔の薬屋を復元しているのですが、そこだけタイムスリップしたような雰囲気を感じていただけるようです。また、「白沢」という病魔除けのお守りはインパクトが強いので、博物館を再訪された方は、たいてい、これは記憶に残っているとおっしゃっています。

また、一見、地味ですが貴重な展示として、日本で最初のペニシリンがあります。医療関係者や薬学に携わっている学生にとっては、ペニシリンの発見、普及にまつわるエピソードは周知されていますので、興味をもって見ていただいています。

ビジュアル的に怖いものやユーモラスなものがありますので、一般の方は見て楽しまれていますし、生薬関係に関心のある方、鍼に興味のある方、文学に関心のある方は、それぞれそこで立ち止まっています。また、学術的な図書館があるので、古い江戸時代の和装本を読み、当時の研究をされる方もおられ、それぞれ関心の持ち方によって、様々なアプローチをされています。

それから、2階にある自分の体力や健康を測定する体験コーナーも人気があり、遠足など大勢ですとなかなか順番が回ってこないようなこともあります。女性の方などは脳年齢や骨密度なども関心を持たれています。



日本最初のペニシリン、現存する最後のアンプル

—**薬草園の植物は実際に薬に使用しているのですか？**

薬草に使えるものですが、ここでは観賞用です。イベントに用いたり、子供達にカカオの実を見せた後、持ち帰ってもらうこともあります。皆さんに渡せるほどの量はありません。ウコンについては、ウコン茶にしてお客様にお出しています。

—**外部との連携は行われているのでしょうか？**

薬剤師会の健康保健祭りや、薬学関係の学会の開催時には植物や展示品などを貸し出し、移動展示を行っています。それから、東京・渋谷の薬学会館に展示コーナーがあり、依頼をうけ定期的に展示を入れ替えています。

当博物館は交通アクセスがあまり良くないため、来ていただくのを待っているだけでなく、こちらから展示物を持ち出して見ていただくことも大事だと思っています。

—**今後の抱負や方向性等、課題等についてお聞かせください。**

たくさんありますが、一つは内藤記念という創業者の想いというものを検証し、実現していきたいです。

また、海外の博物館との連携、学会との連携にも積極的に取り組みたいです。それによって、海外のものを見せたり、薬の歴史に関する学術的な研究を充実させていき、大学ではないけれど大学のような役割を果たしていきたいと思います。

それから、当館はもともと薬の歴史を見せることが中心で過去の薬は見せていますが、現在、未来の薬の展示については、ほとんどされていません。

過去でも未来でも、人と薬の関係には、誰でも健康で長生きしたいという世界共通のコンセプトが脈々と流れています。今でも、世界の病気の3分の2は治療薬がないのです。製薬産業が果たすべき使命はまだたくさんあります。現在、未来の薬はどのように作られるのかという点で、これから展示の内容も工夫が必要になってきます。